

なまくら

吉橋 通夫 著

時は幕末、維新の頃の京都が舞台の物語です。七人の少年が主人公の、七つの物語で構成されています。少年たちはみんな貧しく、明日食べていけるかどうかという暮らしを送っています。七つの物語のどれをとっても、少年たちは似たような境遇で、何の保証もなく、ただ食べていくために、過酷な労働に従事し、ケガをしたり、動けなくなったりときには容赦なく捨てられる。そう書けば、普通はとても暗い、重いそんな短編集のように感じます。が、この物語はそうではありませんでした。どれ一つとして、陽気な楽しい話ではでてこない。いつもなら、途中で読むのを諦めるような筋書きなのに、どうして今回は投げ出さずに読めたんだろう？そういう疑問がふつふつとわき起ります。考えながら読み進めた結果、でた結論が、この本は明るくて、前向き。どんなに辛い環境にあったとしても、「生きる」ということを諦めない。盗みを働いても生きようという方向に向かう。読んでいて思わず、「そつや！ガンバレ」と応援したくなるカンジ。少年たちに手をさしのべる大人たちの言葉に「じーん」としたり、今まで本を読んでいて、これほど気持ちが揺れた本はなかったんじゃないだろうか？と思うほどでした。では、もし次にこの本を読み返すことがあったら、私はどう感じるんだろう。つまらないと思うのか、それとも？時間をおいて読み返した時、どんな場面で自分の気持ちが動くのか楽しみな物語です。

M
Y



掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞